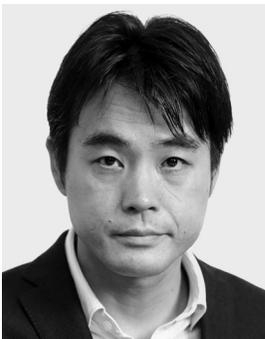


日本を覆う公文書クレンジング —隠ぺいの実態とその背景

毎日新聞社特別報道部記者

おお
ば
ひろ
ゆき
大場 弘行

- *「桜を見る会」の名簿廃棄にみる異常
- *公文書問題の追及を始めた理由
- *多用される公文書扱いされないメール
- *公用メールを使わずLINE活用が日常化
- *意図的に抽象化される公文書ファイル名
- *2001年の情報公開法施行が出発点
- *総理大臣の公文書管理も曖昧のまま
- *安倍総理の面談記録も残っていない
- *野党の追及で急遽作成された面談記録
- *公文書が軽視される背景にあるもの



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

きょうは、ここしばらくたいへん話題になっております公文書の取りあつかいの問題です。毎日新聞でこの問題を継続的に追いかけてまいりました中心の一人でいらっしゃる大場記者においでいただきました。昨年12月、早稲田大学がやっておりますジャーナリズム大賞という、石橋湛山の名前を冠した賞がございまして、そこで大賞を受賞されました。「桜を見る会」もそうですけれども、その前の防衛省の問題、あるいはもりかけ問題など、さまざまなどころで公文書の取りあつかいの問題が漏れ聞こえてまいります。安倍政権下で今かなりひどい状況であるということはみなさんもお感じになっておられるかと思いますが、先ほどお伺いしました

らこの問題は官僚機構の中に根深くある問題で、今始まったことではないんだそうです。ですから、今ある問題は将来にわたってどうなるのか、現場をずっと取材してこられた大場さんから詳しく伺いたいと思います。

大場さんは秋田県のご出身で、早稲田大学商学部をご卒業後、毎日新聞にお勤めになり、現在に至っております。それでは大場さんよろしくお願いたします。（拍手）

「桜を見る会」の名簿廃棄にみる異常

大場 毎日新聞の大場と申します。よろしくお願いたします。

きょうはこのような格式の高い講演会にお呼びいただきましたまして本当にありがとうございます。